

第5章 チューダー朝 [1485~1603年] 初期の庭園

(仮訳)

“Sure gates, sweete gardens, stately galleries しっかりした門、かぐわしい庭園、堂々とした展望台
Wrought with faire pillows and fine imageries; 美しいクッションと精巧な彫像に飾られていた
All those (O pitie !) now are turned to dust これらすべての物が(残念なことに!)今や塵となり
And overgrowne with black oblivion’s rust” そして真っ黒な忘却の錆が蔓延るままになっている
Spenser, *Ruins of Time* スペンサー「時の廃墟」

15世紀末にかけて新しい影響が国に持ち込まれ、その結果多くの変化が始まった。エドワード4世[在位1461~83年]の妹とブルゴーニュ公爵との結婚、その同盟を通じたフランスとの交流の増加により社会生活に様々な変化をもたらされた。バラ戦争の終結に伴う比較的平和な時代により、国内の建築では新しいスタイルが広がり、快適な赤レンガの館が古い城にとって代わった。庭園はもはや要塞化した城壁の中に閉じ込められておく必要はなくなった。新しいスタイルの館は丘の上に建てられることはなく、普通はその下に広がる土地に建てられ、堀によって囲まれていた。堀の中にはちょっとした小さなスペースがあり、そこは庭園に充てられたり、中庭には植物が少しばかり植えられた。平和が続いたことにより堀の防衛線の内側にすべての財産を置いておく必要性は減り、堀の外側に庭園を持つことが一般化していった。そして堀の外に庭園が造られなかった場合でも、城壁の中にあつた時に比べれば、堀の内側により広い空間ができることが多くなったため、この追加されたスペースを利用して、楽しいことを考える余地が生まれ、そして間もなく、デザイン上のいくつかの変化が生み出されるに至った。

最初のイノベーションの一つが柵で囲われた花壇 the railed bed、すなわち格子状 trellis-work の低い垣根で囲われた花壇であった。これらの格子状の柵はチューダー時代を迎える直前から流行り始めたが、何年もの間その人気は続いた。ヘンリー8世[在位1491~1547年]が1533年、ハンプトンコートの庭園の大改造に取り組んだ時、長方形の形をした花壇が国王の新しい庭園にお目見えした。それらの花壇はチューダーの色彩である緑と白に塗られた柵で囲まれており、それはヘンリー8世を描いた原画の中に見ることができるであろう。92ページの図[5-7]はその絵の一部である。ハンプトンコートの1533年の支出には、これらの柵の購入に関する数限りない記載がなされている。



[図 5 - 1] 柵で囲われた花壇 バラ物語のフランス写本より 1450 年頃

B. M. EGERTON 2022.

「[ロンドンの塗装屋 Henry Blankeston] に対する塗装代の支払い、すなわち 96 本の平らな柱 pownchens を白と緑に、油を使って塗装すること、この柱は前述の庭園の柵を両側で支えるもので古典風に antyke 仕上げられ、1 本あたり 12 ペンス、計 4 ポンド 16 シリング。さらに同人に対する塗装代の支払い、すなわち前述の庭園の長さ 960 ヤードの柵を白と緑に油を使って塗装すること、1 ヤードあたり 6 ペンス、計 24 ポンド」(*王室会計局 Exchequer、歳入庫 Treasury of Receipt、諸事帳簿 Miscellaneous Books、No.237. これはヘンリー8世第 24 年のハンプトンコートにおける支出に関する大冊である。)

これらの項目はその呼び方が変わりながら繰り返されている。柱と柵は「古典風な antyke 油彩の白と緑」に塗られていた、とか「平らな柱」は“flat pownchens”の代わりに“flat posts”という具合にである。

もう一つの新機軸として、チューダー時代の初期に導入され、すぐにすべての庭園で人目を惹く特徴となったのはトピアリー、“opus topiarum”であり、それはすなわち、木や茂みを変わった形に刈る技法である。この技法は、イングランドでは目新しかったが、その起源は極めて古く、ローマ人たちには早くから知られていた。ただイングランドではこの時代まで実用化されたという記録はなかった。この新しいアイデアはこの国で大人気となり、これらの木の怪物を作るには大変な時間と手間がかかったものの、2 世紀以上にわたりこの趣向は様式として残り続けた。リーランド Leland [John~, 1506? ~ 52 年 イングランドの古美術研

究家]はその『旅行記』*Itinerary*において、16世紀初期の頃の、目を見張るトピアリーの
実例が見られそうな場所について紹介している。「Uskelle 村、チュートン Tewton から 1
マイルほどのところにあるこの村には、トピアリーの遊歩道が設けられた感じの良い果樹
園がある」。また「レスヒル城」Wresehill Castle では、その果樹園のことを「トピアリ
ーが施された高台は、貝の渦巻きのようにぐるぐると回って簡単にてっぺんに到達できる」
と描いている。そしてこの話はもう一つの変ったものについて語ることに繋がってい
くのだが、それはこの時代に大いに発達した「高台」mount、すなわちレスヒル城にあった
ようなもので、リーランドが刈り込まれた木々を見た所である。13世紀、いくつかの修道
院の中には庭園の壁に向かって土の「マウンド」mounds を作り、壁越しに外の世界を見る
ことができるようにしたものがあつた。その後の何世紀か単純な構造の「マウンド」や「高
台」が庭園にしばしば見かけられるようになったが、チューダー朝時代に至り、「高台」は
以前に比べはるかに重要なアクセサリーとなった。これは通常、土で作られそこには果樹や
その他の木が植えられた。そしてこの高台は果樹園の「あちらこちらのコーナー」に築かれ、
「貴重な職人技による階段」、あるいはらせん状の小径で登ることができるようになってお
り、その小径の片側には、変った形に刈り込まれた茂みや甘い香りのするハーブや花が植
えられていた。ロッキンガム Rockingham には実例となる高台の一つの姿が残されている。
土でできた大きな階段状の高台で、芝生と数本の木で覆われており、庭を取り囲む高い壁の
一部に向かって高くなっており、壁の後ろには以前には砦が立っていた。高台の頂上からは
変った形に刈り込まれたイチイの木が植えられた庭園越しに、遠く広々と広がる田園の
素晴らしい景色が見渡せたから、この高台は初期の段階では、「見張り」すなわち監視塔と
して機能した。庭園や果樹園が狩猟場の中にあるような場合には、鹿の一群が壁近くで草を
食べる時には、この高台は「雄鹿を撃つこともできる」ポイントとしても有用であつた。高
台のてっぺんにはあずまやが作られることもよくあり、それは格子状の低い垣根につる植
物が配されたものであつたり、あるいはもっとしっかりした建物であつたりした。おそらく
この種の装飾の最も素晴らしい見本はハンプトンコートの「高台」であり、数々の資料によ
りそれがどういうものであつたかはっきり知ることができるのである。それは「国王の申し
庭園」の南端に位置しており、この庭園は 1533 年、Edward Gryffyn という名の庭師が
工事監督をしたものであつた。



[図 5 - 2] 高台 ロッキングガム

高台が煉瓦の基礎の上に作られたことは、「ロンドンの煉瓦職人である John Dallen」に対する支払いがあったことでわかる。「25 万 6000 個の煉瓦を新しい庭園の壁の上に積み上げた代金。庭園は国王の宿泊所とテムズ川の間であり、高台の基礎はテムズの横に設けられ、1000 個に対し 14 ペンス、普通に計算して合計 14 ポンド 18 シリング 8 ペンス。そして土が盛り上げられ生垣用の灌木 quicksets [サンザシ類] が植えられた。合計 54 シリング 8 ペンスがキングストンの Lawrence Vyncent と John Gaddisby に支払われたが、これは生垣用灌木 4 台分、1 台につき 3000 本分のセットが入っており、「国王の新しい庭園の横に高台を作るため」に使われた。その他の支出項目としては、「生垣用灌木を結わえて垣根を作るためのセイヨウトネリコの柱」とそれらを「結わえるためのヤナギ wyly の棒 2 束」；そして「高台に植える梨の木 3 本」がある。



[図 5 - 3] 昔のイチイの小径とロッキンガム高台

「南あずまや」は高台の上にあったものがそうであると思われる。しかし「西あずまや」の会計簿にも記載がなされており、それは大変よく似通っていたようで、両方のために同じものが購入され、「John a gwylder smith」[鍛冶屋組合] に対し、「南あずまやの屋根の fretts [格子模様] 用に釘 broddes300 本を 100 本 12 ペンスで 3 シリング」、また国王御用達のガラス屋 Galyon Hone に対し、なにがしかの額が支払われ、以下はその実例である。「庭園の高台のアイテム 48 の照明、上の階の各照明は $4\frac{1}{2}$ フィートの大きさ、下の階の各照明は $4\frac{1}{2}$ フィート 3 インチの大きさで、これら合計 211 フィート、1 フィートあたり 5 ペンス、[合計] 4 ポンド 7 シリング 11 ペンス」。これによりあずまやがいかに大きかったか、またいかに入念に作られたかが少しはわかるであろう。さらに会計簿からは「南あずまや」が西あずまやと壁沿いに走る展望回廊 gallery で結ばれており、それは木製のポールと格子垣で作られていた。このような展望回廊は 15 世紀終わりから 16 世紀初期の庭園の特徴に彩られており、そのデザインはいくつかの昔の文献から知ることができる。その典型は、Crispin de Pas(または Passe) [1564 ~ 1637 年 フランドル・オランダ系] 著の『花の庭園』*Hortus Floridus* であり、1615 年に英訳された。これらの展望回廊はヘンリー 8 世が手を加える以前には八

ンプトンコートに実在しており、キャベンディッシュがウルジーの生涯を韻文で描いた伝記の中に登場してくる。

[訳注：George Cavendish 1497~1562 年 ウルジーの伝記作家として有名。Thomas Wolsey 1475?~1530 年 枢機卿。ローマ教皇からヘンリー8世の離婚許可が得られず大逆罪に問われた]

(仮訳)

“My galleries were fayre, both large & longe	私の展望回廊は美しく、大きくて長くて
To walk in them when that it liked me beste	そこに歩いて行くのはそこに一番行きたい時
* * * * *	
With arbours & alleys so pleasant & so dulce	あずまやと小径はすごく楽しくすごく心地よく
The pestilent airs with flavours to repulse.”	有害な空気を香りで追い払う



[図 5 - 4] 展望回廊のある庭園「花、果物、動物、鳥、飛ぶ虫の第 2 巻」より 1650 年

ここに描かれているような展望回廊やあずまやが存在していることを示す事例を私は一つとして知らない。それらは滅失するような材料で作られており、たとえばつる植物 creepers、ブドウ類 vines、バラやスイカズラ honeysuckle が植えられた木製の格子垣などは、たとえ意図的に取り壊されたのでなくとも時が経つにつれとっくの昔に壊れてしまっていたに違いない。加えて大変残念なことに、あったとしてもほんの少数の実例しか英語で

書かれた絵入りの本には残っていない。これに対し、当時の外国の写本、特にフランスやフランドル [ベルギー西部を中心にオランダ南西部からフランス北東部にまたがる地方] のものには多数の絵が載っているのである。英語の実例が少ないのは、宗教改革の時、宗教的な本が抹殺されたことが一因であることは間違いない。これらの絵は主に祈禱書の冒頭に描かれているカレンダーの中に見つけられる。祈禱書、あるいは時禱書 Books of Hours [祈禱時間に読むべき聖書からの文選・指示の記載された本] には、5月という月の彩飾画としてしばしば庭園が描かれ、あるいは聖なる題材の説明として、当時の庭園というものが引き合いに出された。展望回廊は庭園の外の壁に沿って走り、一面は壁、他方は木の柱が形作る連続するアーチが続き、そして壁と柱の間の通路はつる植物と木製の枠組みで覆われているか、あるいはもっとしっかりしたものを使って、隠れ場としてよりふさわしいものが作られた。時には展望回廊はぐるっと三面を壁で囲まれることもあったが、一面だけというのがより一般的なやり方であったようで、館からあずまや、あるいは高台に向けての目隠しされた通路としての役目を果たすことが多かった。

バッキンガム公爵エドワード・スタッフォード Edward Stafford [1478~1521年] は、16世紀初期の頃、グロスターシャー州ソーンベリー Thornbury に広大な庭園を造る計画を開始したが、その計画を実行する前に、反逆罪に問われ死刑となってしまった。当時の国家文書の中に、1521年5月、彼の土地の調査があり、その中に次のような抜粋がある。それは「庭園」gardens という見出しがつけられ、展望回廊の様式についての説明がされている。「(城の)内側の南側にはきちんとした庭園があり、それとほぼ同じく美しい展望回廊が主な宿泊所から礼拝堂と教区教会へと上ったり下ったりしながらつながっている。この展望回廊の外側は石で要塞化され、内側は木造でスレートで覆われている。この城あるいは荘園の館の東側には、歩くと気持ちのよい庭園があり、そこは高い壁で囲まれ、要塞化している。あちらへ行くには上り下りしながらつながっている展望回廊か、または別の私用の通路 privy ways を通っていく。その専用庭園 privy garden の脇には大規模で美しい果樹園が広がり、そこに溢れる若い木々の枝は、果物、たくさんのバラなど、嬉しい気持ちにさせるものでたわわとなっている。そしてその同じ果樹園には、のびのびと歩くための多くの美しい小径がある。そしてその果樹園をぐるっと回るとちょっとした高いところに出て、イバラ thorne とハシバミ hasel で完璧に覆われた休憩所のある別の美しい小径につながっている。そしてその外、この果樹園の外側の部分は丸太の柵 sawn palings で取り囲まれ、溝や灌木生垣はない」・・・「この果樹園から外に出ると、新しく造られた美しい庭園に好きな時に行き入るためのいろんな裏門がいろんな場所に作られている」。この館と庭園は、エリザベス女王の時代以降、廃墟になるまま打ち捨てられ、昔の庭園の面影は一つも残されていない。(*外側の城壁だけは残されており、そして再建され、現在の庭園は50年ほど前に、現在の所有者 Stafford Howard 氏によって造られた。)



[図 5 - 5] 庭園の館 ラウズリ Loseley

あずまや、あるいは「休憩所」の別の事例として、ヨークのエリザベス Elizabeth of York [ヨーク家リチャード4世の長女、ランカスター家ヘンリー7世の女王に迎えられバラ戦争が終結]のために作られたものがある。「1502年7月10日、ウィンザー城の事務係のヘンリー・スミスに支払われた項目として、あずまやを作るためにどこそこの労働者に彼が支払ったお金。このあずまやはウィンザーの小さな庭園にあり、女王の祝宴のためのもの、4シリング8ペンス *iiiijs. viiijd.*」。さらにヘンリー7世 [在位1485~1509年]の第18年、5シリングがロンドンのBaynarde城にあるあずまや一つを作るために支払われた。

(*Wardrobe Accounts.)

通常見られるあずまやは、チョーサーが以前描いたものと今もなお変わらず、芝生の座る場所があって、登攀性植物に覆われた格子垣を備えたものであった。このようなあずまやについて、チューダー時代のある詩人はこう語っている († Skelton, *Garlande of Laurell.*)

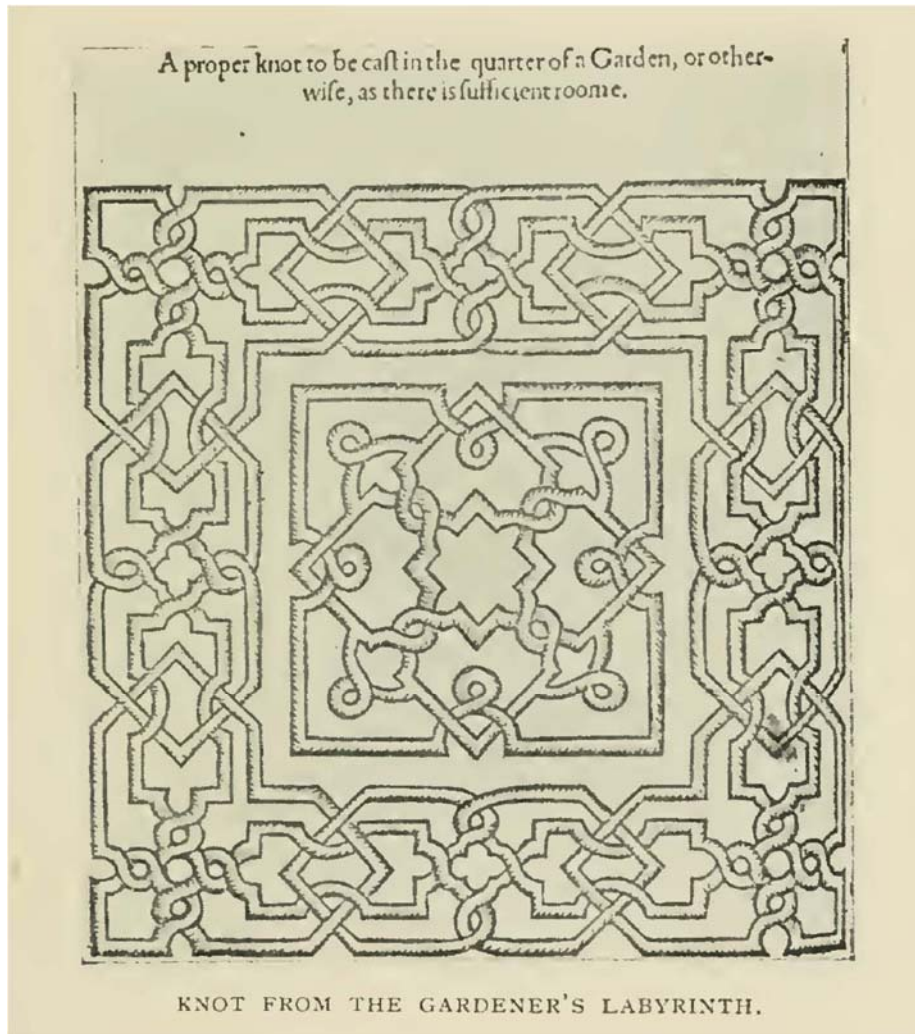
(仮訳)

“The clowdis gan to clere, the myst was rarifiid	雲は晴れ、霧は薄くなり
In an herber I saw, brought where I was,	連れて行かれたあずまやで私の見たのは
There birdis on the brere sange on euery syde : -	そこにはイバラの上で歌う鳥たちがどちらにも
With alys ensandid about in compas	小径には砂がぐるっと一周敷かれ
The bankis enturfid with singular solas	土手は芝で包まれ、それはこの上ない喜びで

Enrailed with rosers, and vinis engrapid ; - バラで囲まれ、ブドウで覆われ
It was a new comfort of sorowis escapid.” それは悲しみから逃れる新しい楽しみであった

そのほかの休憩所は庭園の壁沿いに用意され、それは日陰の隅のような所に座席になるような草の土手があって、モアが『ユートピア』 *Utopia* の中で触れているようなものであった。「私たちはみな私の家へと向かい、庭園に入ると緑の土手に座り、お互いに会話を楽しんだ」と彼は書いた。あずまや、あるいは庭園の館 garden-house は、煉瓦や石でできていることもあり、壁に作り込まれた小塔 turret のように建てられた；このようなあずまやの初期の例がサリー州ラズリ Loseley に現存している。もとは4つの館があり、庭園の壁の各コーナーに1つずつあったが、今はそのうち3つが残っている。この時期のもう一つ興味深い庭園として、ハートフォードシャー州 Hadham の宮殿のものがある。これは何百年もの間、ロンドンの司教たちの所有に属していた。ここはヘンリー5世の未亡人キャサリンが、オウエン・チューダー Owen Tudor [1400 頃~1461 年 チューダー家の祖] と [事実上] 結婚した後の居所でもあり、ヘンリー7世の父エドモンドが生まれたのはこの場所であった。現在の庭園は壁により両面が囲まれており、別の面はイチイの高い生垣で3ヤードの分厚いもので守られている。

16世紀の初めに、垣根の手すりが真っすぐな花壇 straight-railed beds とあわせて、新しい花壇が取り入れられた。すなわち「結び目花壇」 knotted bed あるいは結び目 knot である。それは奇妙で複雑な幾何学模様の形をしていた。1520年までにはこのスタイルは広く使用され、ほとんどのイングリッシュガーデンでこの目新しい結び目花壇の仲間がお披露目されることになった。キャベンディッシュはハンプトンコートのことを「あまりにも結ばれているため表現できないほど」と書いた。結び目の中の土は少し盛り上げられ煉瓦やタイルの縁取りでその位置が保たれるようにしてあるか、あるいはより多く見られた方法としては、通路と同じ高さにしてツゲ box、アルメリア [ハマカンザシ ; イソマツ科] thrift などにより区切るというやり方である。一般的には、この花壇ではその分厚い縁取りの内側に、装飾的な花や小さい低木が植えられ、いわば「絨毯花壇」 carpet beds のようにレイアウトされた。ただし、時には植物の代わりに様々な色彩の土が敷き詰められることもあった。1502年のバッキンガム公爵の家計簿には3シリング4ペンスの支払い記録があるが、これは「庭師 John Wynde に対し、公爵の庭園の結び目を作った勤勉さ」に対する支払いであった。そして同じ年、ノーサンバーランド第5代伯爵の会計簿の中に、一人の庭師が「1時間ごとに庭に出て erbis [ハーブ] を植え、結び目を刈り込むこと、そしてこの庭園を1時間ごとにきれいに掃き清める」ために雇われたことが記載されている。これらの結び目のデザイナーには極めていろいろな人がいた。そのデザインは幾何学模様であったり、動物の奇抜な形であったりした；複雑に入り組んだ幾何学的デザインが明らかに一番人気があり、本にも一番頻繁に出てくる（図版参照）。



[図 5 - 6] 結び目花壇 『庭師のための迷路』より

別のスタイルは次の詩に描かれている (**The Historie of Graunde Amoure and la bell Pucell, called the Pastime of Pleasure.* Stephen Hawes 作 編 1554 年)

(仮訳)

“Then we went to the garden glorious
 Like to a place, of pleasure most solacious
 With Flora painted and wrought curiously
 In divers knottes of marveylous greatness
 Rampande Lyons, stode by wonderfly
 Made all of herbes, with dulset swetenes
 With many dragons, of marveylous likenes

次に我われは栄光に満ちた庭園へと向かった
 もっとも官能的な喜びの場所にも似て
 花と春の女神フローラは入念に描かれ細工され
 目を見張る立派な様々な結び目花壇には
 後ろ脚で立ち上がったライオンが見事に横に立ち
 ハーブのすべてで作られ、心地よい甘さで
 あわせて多くのドラゴンが、どれもよく似ていて

Of diuers floures made full craftely

色とりどりの花で巧妙な極みで作られ

By Flora coloured, with colours sundrye.”

フローラの横に、様々な色で彩られたフローラの

以下に列記する花々は、チューダー朝時代の結び目花壇や庭園の境界で栽培されたものであり、当時の著作家により取り上げられたものである。アカンサス [ハアザミ] acanthus、ツルボラン asphodel、プリムラ = アウリキュラ [アツバサクラソウ] auricula、アマランス [イヌビユ] amaranthe or “blites” [学名 *Amaranthus blitum*]、バチラーズボタン [花の形がボタン状になる植物の総称] bachelor’s buttons、ヤグルマギク [blue bottle という別名もある] cornflowers or “bottles”、カウスリップ [キバナノクリンザクラ] cowslips、ラッパスイセン daffodils、デイジー、「フランスエニシダ」 French broome、ナデシコ類 3 種 gilliflowers (3 varieties)、タチアオイ hollyhock、アイリス、ジャスミン、ラベンダー、ユリ、スズラン、マリーゴールド [キンセンカ] スイセン (黄色と白)、サンシキスマイレ pansies, or heartsease [RHS では wild pansy または heart’s ease]、シャクヤク、ツルニチニチソウ periwinkle、ケシ類、サクラソウ類 primrose、ハナダイコン rocket、バラ、ローズマリー、キンギョソウ snapdragon、ストック [アラセイトウ] stock、アメリカナデシコ [ビジョナデシコ] sweet william、ニオイアラセイトウ wall flowers、ホオズキ winter-cherry、スマイレ、そしてこれらのほか、ミントやマジョラム [マヨラナ] marjoram などの甘い香りのするハーブがある。

さてチューダー朝時代の庭園の主な特徴、すなわち柵で囲われた花壇、結び目花壇、高台、あずまや、そして展望回廊について概観してきたが、ここからはどのような庭園が造られたかだけでなく、この時代の前半において存在していた古い庭園はどうなったのか、について考えることとしよう。これまでの章において、修道院の庭園が全国各地においてどういう立場に置かれたかについては若干見てきたところである。そして今私たちは宗教改革の時代に至り、この大きな運動が庭園に影響をどのように与えてきたか、その展開をさっと見ておかなければならない。修道院に対する巡視とそれに続く弾圧は 1534 年に始まった。規模が大きな方の修道院が最初に攻撃され、続いて小さいものに移って行った。この動きは素早く次々と実行され、1536 年、北部地区では 88 の修道院が 2 週間のうちに報告され*、202 の修道院は 1538 年から 40 年の間に弾圧され、あるいは降伏した。

(*Gasquet, *Henry VIII. and Eng. Mon.*)

[ヘンリー8世による] 修道院解散 Dissolution [1536~41年] の時点では王国全体にわたり 700 を超える宗教施設が点在していた。これらの修道院のすべてがそれぞれに庭園を所有していたとは言えないが、それは町中にあったものはスペースが極めて狭かったのと、修道会 Orders の中には農業にまったく関心のないものもあったからだ。数から言うと、ベネディクト修道会とシトー修道会が圧倒的であり、多くの場合、彼らは大地主であり、自分の土地を持った農民であり、園芸の技術に優れていた。しかし、ファウンテンズ Fountains [イングランド北東部、遺跡は世界遺産]、Jervaulx、または Netley、グラストンベ

リーGlastonbury [イングランド南西部、アーサー王の埋葬地とされる]、セントオールバンズ、またはウィットビーWhitby [イングランド北東部、漁港・保養地] その他立派な修道院や威厳のある修道分院の庭園はどれ一つ残っていない。時には、庭園に関する記録が残されている場合もあるが、これは巡視に来て価値のあるすべてのものを収用してしまった王室の役人の手によるものである。オックスフォードではアウグスティノ修道会が木を全部切り倒してしまったことを役人たちは悔やんだが、フランシスコ修道会は「肥沃な土地、森林と可愛らしい庭園」を所有していた。Waverley のシトー修道会の修道士たちは当時大変貧しくて、大修道院長は「彼の修道院の資産が依拠している農業の調査をすること」の許可を与えられた。古い修道院の庭園の面影はほとんど残されていない。ウェストミンスターには立派な庭園があり、そこはダムソン damson の木が有名で、病院の横の庭では病人の修道士たちが散歩できた。この一部はカレッジ所有の庭園の中に残っているが、前世紀の初めに新しいカレッジが建設された時に、そのいくばくかは建築敷地になってしまった。エリザベスが即位した時、大修道院長の Feckenham を呼出した。彼はメアリーの治世の時にウェストミンスター寺院に復権を果たしていた。彼は召喚を受けた時、庭にニレ elms の木を植えていたところであり、その仕事を終わる前に女王の前へ出た。院長は囚われの身のまま生涯を終え、彼の修道院は間もなくカレッジへと作り変えられたが、その植えたニレの木、その子孫は今日まで残っている。

古い修道院の中庭があったその場所で、破壊を免れ、現代の庭園に生き続けているものの中で一番多いものは養魚池である。ただし、これらの池は厳密に言うと、修道院の庭園の一部をいつも構成していたとは言えないものであった。しかしながら、それは有用であると考えられ、風景庭園の庭師たちによってさえも、壊すよりは手を加えようということで残されることが多かった。サイレンセスターでは、現在の教区教会は見事な建物だが、その横にある大修道院の教会は、その昔、あまりにも大きくなりすぎ建物を覆い隠すまでになってしまった。そうであったのに今や大修道院の教会と隣接する建物群は完璧なまでに消え去ってしまい、修道院時代のほとんど唯一の痕跡は、同じ敷地に建てられた家の土地にある小さな水たまり、昔の養魚池の名残だけになってしまった。Hurley-on-Thames では、修道士の魚の生け簀は現存しており、また 1 マイルしか離れていない Bisham Abbey では、庭園は 3 方が堀で囲まれ、修道士たちの時代の遺跡となっている。ヨークシャー州の Hackness では、修道士の池は今は湖に作り変えられたが、ノッティンガムの Newstead Abbey では池がそのまま残されている。イチイの古木の影が落ちる生け簀があり、その水は疑いもなく黒衣托鉢修道士 Black Friars の時代から生き残ったものである。水底からは真鍮製の鷲の聖書朗読台が発見された。そこには修道院に関する貴重な事績が多く刻まれてあり、修道院解散の時に修道士たちによってそこに隠されたものであった (31 ページ図参照)。シュロプシャー州の Hatton Grange では、Buildwas Abbey の独居房があった場所に、修道士により作られた当時のままに池も残されている。その 4 つの池は大修道院長、煉獄、地獄、そして水浴びプールという昔の名前を今に残している。

これらは一連のもので、幅広い土のダムにより区切られ、地中深く掘られて、土手は急斜面となっている。このようにして最初に造られた庭園は消え去ったが、修道院の土地は当時の名門一族へと与えられた。これらの土地が現世の人々の手に渡ったことにより、堂々とした館が建てられ、そして以前とはまったく違った性格ではあるが美しい庭園が造られ、昔の大小の修道院があった場所を今美しい景観としているのである。ウォーバン

Woburn [17世紀にベッドフォード公爵のために改築、造園家レプトンによる鹿園がある]

Welbeck、バーリー-Burghley [セシル家の大邸宅]、サイオン Syon [ノーサンバーランド公爵の旧邸]、バトル Battle、ビューリ Beaulieu、ラムゼー-Ramsey、Audley End、そのほか多くのものがこれに含まれる。

サリー伯爵は、ノリッジ近くの聖レオナルド修道院があった場所に館を建てその周りに広大な庭園を造り、そこをサリーの山 Mount Surrey と呼んだ。この頃になると、いくつかの共有地で囲い込みが行われた結果、かなりの暴動が起き、1549年にはサリーの山のリンゴ園の木がすべて切り倒され、テントや小屋を建てるために使われた。この例は、宗教的施設があった場所に設計された重要な庭園の最も初期のものの一つであり、ほかの多くの新しい所有者たちがこの真似をするには、ガーデニングを楽しむ趣味がもっとも一般的になる次の世代まで待たなければならなかった。

ハンプトンコートについては、チューダー朝の庭園の特徴を述べた箇所で、すでに触れたところである。これらの庭園を造るにあたって要した費用に関しては、ウルジー枢機卿とヘンリー8世の指示のもと、完全なまでの形で会計簿が残されているので、正確な計画というものはわからないものの、それらがどのようなものであったかについては、極めて明確な姿というものを浮かび上がらせることができよう。ウルジーが建物用、庭園、狩猟地 park として確保した土地は2000エーカー [約800ha] に及んだ。この土地の南西の角には古い荘園館 the manor house があったが、枢機卿はその周りに庭園と果樹園を配置し、そこを煉瓦の壁で仕切って、壁の外側には狩猟地を設けた。彼は荘園館の庭園の一部を残しておいたが、これは「古い庭園」として何回か出てくることからわかる。この当時、ジョン・チャップマン John Chapman が庭師頭 head-gardener で、1529年に失脚させられた枢機卿の土地を国王が自分のものにした時にも、年収12ポンドの給料でその地位に留まった。この庭園はその後まもなく大幅に拡張された。新しい果樹園が古い庭園の北側に造られ、梨、ダムソン、セイヨウカリン、サクランボ、リンゴ、キュウリ、メロンが栽培され、43ブッシュのイチゴが一度に植えられた。女王にバラを届けるためにフラワーガーデンがあり、キッチンガーデンでは「国王の食卓用のハーブ」が栽培された。これらの庭園の一部は1533年に新しい庭園が造られた時に取り壊された。そして土地には肥料がまかれ、いくつかの区画に慎重に測って区分され、それぞれが煉瓦の壁によって囲われた。一番大きな区画が国王の新庭園 the King's new garden であり、そこは今「王室庭園」Privy Garden と呼ばれている。ここには砂利が敷き詰められた園路、そして小高い盛り土の上には日時計が置かれ、園路と園路の間には、柵で囲われた花壇が芝生の中に作

られた。柵にはバラが絡まり、イチイ、イトスギ cypress あるいはセイヨウネズ juniper の木が各花壇の中央に植えられた；一方、壁沿いにはリンゴ、梨、ダムソンの木が植えられ、その下には「スミレ、サクラソウ、アメリカナデシコ [ビジョナデシコ]、クローブピンク [オランダナデシコ] gillifer slips、ミント、その他甘い香りの花」が咲き、さらにこの庭園の中には高台とあずまやが設けられた。もう一つの区画は「池の庭園」Pond Garden であり、そこには池だけがあったようで、飾りと言えば「動物」beestes のみ、なぜならそこに花が植えられたとは一言も書かれていないからである。



PICTURE AT HAMPTON COURT SHOWING THE RAILED BEDS AND BEASTS.

[図 5 - 7] 絵画 Hampton Court 柵で囲われた花壇と動物を描写

また「小さな庭園」little garden というのもあり、67本のリンゴの木が「ロンドンの商人、庭師ウィリアムから1本6ペンス」でこの庭園用に購入されたということ以外、あまり知られていない。Hampton Courtに関し、ほかのすべての庭園と際立って違っている

特徴として当時私たちが知りうるものがあるとするれば、それは「動物」beasts と「日時計」dials である。「風見」vanes が彫られた動物、そして真鍮製の日時計は庭園と果樹園の至る所に置かれていたようである。動物は柵で囲われた花壇に沿って一定間隔で置かれるとともに、高台の周りと池を一周して置かれ、これらに関する記載は会計簿の中に極めて頻繁に出てくる。（*ヘンリー8世第25年（1533年） Exchequer, Treasury of the Receipts, Miscellaneous Books, No. 238）

「加えてウェストミンスターの時計屋、Bryse Auguston に対する支払い、国王の新庭園用の真鍮製日時計を20個製作分、1個4シリング4ペンスで4ポンド6シリング8ペンス。- 国王の新庭園用の木彫りの動物を製作分、- キングストンの石工、Edmund More に対する支払い、国王の新庭園に設置する国王と女王の動物159個の切り出し・成形・彫刻する費用として1個20シリング・・・159ポンド」

（1530年）「ウェストミンスターの時計屋、Anthony Transylyon に対する項目、私的な privy 果樹園に置く日時計7個を購入分、1個4シリング4ペンスで30シリング4ペンス - 私的な果樹園の柱の上に動物を置く建具屋 Henry Curren に日当8ペンスで4シリング；John Carpenter に日当6ペンスで3シリング。私的な果樹園の国王の動物の塗装代・・・そのいくつかは国王の紋章をつけた風見を持っている」

（1534年）「国王の新庭園の動物を金メッキし塗装する費用 - ロンドンの Henry Blankston に対し（以下の各種合計）雄ジカ11頭、ライオン13頭、グレーハウンド16頭、雌ジカ10頭、ドラゴン17頭、牡牛9頭、アンテロープ13頭、グリフィン15頭、ヒョウ19頭、yallys11頭（別の箇所では jalls2頭）、雄羊9頭、および高台の頂上にライオン1頭、加えて風見」

（1535年）「前述のあずまや（=南と西のあずまや）の項目として、国王と女王の副紋章 badges25個、価格は1個3シリングで3ポンド15シリング。同じあずまやの項目として、国王と女王の紋章 arms8個、価格は1個4シリングで32シリング。キングストンの彫刻師 Harry Corrant に対する支払い、国王と女王の動物38個を加工が容易なフリーストーンを使って製作、設置する費用として、1個26シリングで49ポンド8シリング。これらの動物は国王の紋章と女王の紋章がついた楯を持っており、言い換えればドラゴン4頭、虎6頭、グレーハウンド5頭、雄ジカ5頭、アナグマ4頭が池の庭 the pond yard の中の池の周辺に並べられた。」

今日見られる「池の庭園」の噴水は、数多くの動物が並べられていた「池の庭園」のおそらく名残りであろう。ヘンリー8世の時代にはこの池にはいささか風変わりな方法で水が供給されていたが、それは会計簿に「夜中にテムズ川から水を引いて池を満杯にする労働者に対する」代金が記載されていることからわかる。

このほかにも王室の庭園はいくつかあり、そのために購入された物や、庭師たちの賃金に関する項目がヘンリー8世の国王手許金 the Privy Purse の支出1530 - 32年、およびメアリー王女の1536 - 37年に出てくる。グリニッジのことが会計簿にはしょっちゅう書かれており、ヘンリーと娘たちにとってお気に入りの夏のリゾートの一つであったようであ

る。支払いは主に Walsh という名の庭師頭に対してなされ、これは「草取りと穴掘り」および「庭園の中の片づけ ordering」作業をした労働者の賃金であった。この庭園は、グロスター公爵ハンフリー [1390 ~ 1447 年 ヘンリー4世の子 ルネサンス期文芸のパトロン] により宮殿が建てられた時には、おそらくすでに造られていたと思われ、それはヘンリー6世の治世の初期で、当時この宮殿は「プラセンシナ」Placentia とか「プレサンス」Plaisance という名称で通っていた。1519年当時、その庭師頭は Lovell と言い、年収 60 シリング 8 ペンスをもらっていた。その少し後、彼はリッチモンド庭園に転職し、給料は 4 半期で 3 ポンドへと上がった。彼は国王の食卓に「ダムソン、ブドウ、ヘーゼルナッツ、桃、リンゴ、その他の果物、そして花、バラ、その他の水 sweet waters」を提供した。

ビュリー Beaulieu [イングランド南部ハンブシャー州の村]、あるいは Newhall には「小庭園」と「大」の 2 つの庭園があったようだ。小さい方はキッチンガーデンで「国王の食卓」を「ハーブや根菜 rootes、イチゴ、アーティチョーク、レタス、キュウリ、サラダ用ハーブ」で彩った。1532年の大きな庭園の管理人は John Rede であった。(*State Papers, ヘンリー8世 公文書館)

ロンドン塔の壁の内側の庭園と Baynarde 城の庭園はヘンリー8世の時代には維持されていた。会計簿への記載がしばしば見られることから、王室の庭園が Wanstead (Robert Pury が 1532 年には庭師でいた) (†同書)、ウェストミンスター、ウォルサム Waltham、ウッドストック、Oatlands にあったことがわかるが、これらは国王が好んだリゾートに比べるとそのスケールはそれほど大きくはなかったようである。同時代においてはウィンザーは他の王室の庭園に比べると注目されることは少なかった。ウィンザーの庭園は現在ではまったく違った形に改造されてしまったので、昔の庭園がどこにあったかという場所すらはつきりとは特定することはできない。1472年、エドワード4世により Louis de Bruye のレセプションがウィンザーで開かれた時、それを目撃した人の手になる会計簿がある。彼らは狩りに出かけ、夕方遅く帰ってきた。「その時はすでに夜に近かったのに、国王は自分の愉楽の園である庭園とブドウ畑へと客人を案内し、そして再び城に入っていた」。この庭園とブドウ畑はおそらくヘンリー8世の治世下においては手つかずのまま残っていたと思われるのは、その改造に関することが一切触れられていないからだ。ヨーク・プレイス York Place、後のホワイトホール宮殿の庭園はウルジーにより特別の趣向で注意深く設計され、ハンプトンコートと同様に、この場所も国王のものとなった。

ヘンリー8世の治世も終わりになる頃、ハンプトンコートの改造を終えた国王は、サリーのユーエル Ewell の近くにあるノンサッチ Nonsuch の土地の設計と美化を考えるようになった*。Cuddington の土地を 1538 年に買ってそこに宮殿を建てた。

*Minister's Accounts、ヘンリー8世の第 31-32 年、No.10 サー・ラルフ・サドラ Sir Ralph Sadler は荘園の執事として「庭園、リンゴ園および敷地」"Gardinorum, Pomariorum et ortorum"の管理に対し 1日 4シリングを受領した。

(仮訳)

“Which no equal has in art or fame 芸術性と名高さにおいて比べようもないもの
Britons deservedly do Nonsuche name.” 英国民にふさわしいその名はノンサッチ

当時の別の作家は、この宮殿を描いて、このように言った。「宮殿そのものと言え
ば、鹿で一杯の狩猟地から、気持ちのよい庭園、格子垣で飾られた茂み、新緑に包まれた
空間 cabinets of verdure、木々で深く囲まれた小径に至るまで大きく広がっており、それ
は「健康」とともに住む場所で偶然に「喜び」と出会ったような場所のように思えた」(†
Nichols, *Progress of Queen Elizabeth.*)。ヘンリー8世はノンサッチを最後まで完成させること
はなかったが、王のデザインを引き続き実行したアランデル Arundel 公爵ヘンリー・フィ
ッツアラン Henry FitzAlan [1512 ~ 80 年 廷臣・オックスフォード大学総長] の時代までは宮
殿は存続した。エリザベス女王 [在位 1558 ~ 1603 年]、ジェームズ1世 [在位 1603 ~ 25 年]
のアン女王そしてアンリエッタ・マリア Henrietta Maria [チャールズ1世の妻] はみな宮
殿を訪れたが、長くは滞在しなかった。1650年、議会による宮殿と庭園の調査によると、
壁で囲まれたいくつかの庭園があり、それらは分厚い棘のある生垣で区分され、そして小
径や荒地、また王室専用庭園 privy garden、大きなキッチンガーデンなどが存在してい
た。館の前には階段状のテラスもあり、「しゃれたボウリング用の芝生」があった。全体
的なスタイルとしてはむしろイタリア的であり、数多くの噴水と彫像が見られた。チャー
ルズ2世はこの宮殿をクリーブランド Cleveland 公爵夫人に与えたところ、彼女はそれ
を取り壊し、さらにその孫グラフトン Grafton 男爵により、木は切り倒され狩猟地は潰さ
れ、かつては壮大さを誇ったこの宮殿を完全に破壊してしまったのである。(‡ *Camden's
Britannia*, Ed. Gough, 1806年)

花壇の飾りやレイアウトについては、以上のような進歩が見られつつあった一方、果樹
園およびキッチンガーデンがまったくもって放置されたままということではなかった。既
に広く利用されていた果物に加えて、ほかのものが持ち込まれ、そして元からこの国にあ
ったものには品種改良がなされた。イチゴは広く栽培され、注意深く育てられた。

(仮訳)

“If frost do continue take this for a lawe もし霜が本当にいつまでも続くようなら
The strawberries look to be covered with strawe イチゴは麦藁で覆われることになる
Laid overly trim, upon crotchis and bows きちんと敷いて、枝の分れや垂れたところにも
And after uncovered as weather allows.” * そして後で天気がよくなれば覆いはずす

* Tusser, *Five Hundred Pointes of Good Husbandrie.*

次の詩句から、9月の農作業では、どこからイチゴの苗を調達していたかが明らかであ
る。

(仮訳)

“Wife unto thy garden and set me a plot 女房は庭に入り私に小さな場所をくれた
With strawberry rootes of the best to be got. イチゴの苗で手に入る一番いいものを持って
Such growing abroad, among thornes in the wood 野外に生えている、森の中のイバラの中に
Wel chosen and picked prove excellent good.” いいのを選んで摘めば、とびっきり上等とわか
る

野生のイチゴの苗が集められたのは、一般民衆のためだけではないというのは、すでに何回も引用されてきたハンプトンコートの会計簿の中に、国王の庭園用に森から採ってきたイチゴの苗に対し支払いがなされた記載が何か所もあるからである。(↑新しい庭園用のイチゴの苗、スマレ、サクラソウの苗の購入 - Ales Brewer と Margaret Rogers への支払い 8 シリング 6 ペンスは、34 ブッシュルのイチゴの苗、サクラソウ、スマレを 1 ブッシュル 3 ペンスで採集してきたことに対し。キングストンの Matthew Garrett への費目は前述の苗および花を 20 日間で植え付けたことに対し、1日 3 ペンスで 5 シリング。)

ラズベリー [ヨーロッパキイチゴ] raspberry はこの時代までは無視されてきたようなものだったが、今になってもそんなに広く栽培されてきたようには見えない。ターナー Turner [William ~, 1509/10 ~ 68 年 英国植物学の父] は 1548 年にこのように言っている。「英語では raspases とか hyndberies と言われる野生のラズベリー Rubus ideus は、東フリースラント Freseland [オランダ北部 Friesland] の森でとても数多く生い茂り、・・・ イングランドのいくつかの庭園でも栽培されている」、そして続けて「その味は酸っぱい」とも言う。グーズベリー [セイヨウスグリ] gooseberry は初期の庭園には出てこないが、この時代になると栽培されていた。1516 年にはヘンリー 8 世の庭園のいくつかでは植えられていた。ターナーはそれを「goser [グーズベリーの方言] の茂みとかグーズベリーの茂み」と呼び、グーズベリーについて「私がイングランドで見たことがあるのは庭園の中でだけであるが、海外のドイツではほかの違った茂みの中の野原で見たことがあった」と言っている。この一節が奇妙に思われるのは、この件に関しては、グーズベリーははたしてこの国に自生している植物かどうかをめぐって、しばしば議論されてきていたからである。タッサー Tusser [Thomas ~, 1524 頃 ~ 80 年 イングランドの詩人・農民] はこれは 9 月に植えるべきだと述べている。

(仮訳)

“The Barbery, Respis, and Gooseberry too バーベリー、キイチゴ、そしてグーズベリーも
Looke now to be planted as other things doo. 今がその植え時、そのほかのものと同じように
The Gooseberry, Respis, and Roses, al three グーズベリー、キイチゴ、そしてバラ、この 3 つは
With strawberries vnder them trimly agree.” その下のイチゴときれいにお似合いで



[図 5 - 8] 庭園の古い壁沿いのアプリコットの木 Littlecote

栽培されている果物の仲間として新しく加わった果物で何が一番素晴らしかったかと言えば、それはアプリコット [アンズ] apricot で、16 世紀半ば以前に持ち込まれたことは 確実で、おそらくヘンリー 8 世の庭師のウォルフ Wolf により 1524 年頃持ち込まれたのであろう。ターナーはその 2 つの著作において、アプリコットについて *Malus Armeniaca* の名称で取り上げ、英語名として Abrecok 、あるいは Abricok と名付けた。もっとも自分としては「早生の桃 *an hasty peche* という名称の方がより適切で、ふさわしいと思うが、この木は広く知られているから、どういう名称にしたらよいかについてはあまりこだわらない」として、その考え方は変えなかった。彼がこのような名称をつけた理由は、この果物が桃よりもずっと早い時期に実るからである。この同じ発想はアプリコットという用語に表れており、それはラテン語の *præcoqua* あるいは *præcocca* から来ている。ターナーは 1548 年に「わが国においてはこれらの木はまだほんの少数しか植えられていない」と言い、1551 年には「この種類の木はドイツ *Almany* ではたくさん、イングランドでは何本か見たことがある」と言っている。パークシャーのリトルコウト Littlecote の

美しい古い庭園には、この国に初めてアプリコットの木が持ち込まれた時に植えられと思われ、今もなお実をつける木が2本植えられている。

タッサーは1573年、1月に植えるか移植されるべき果物のリストを書きおり、そこにはアプリコット、彼の呼び方では Apricocks が含まれている。

そのリストとは次のようなものである。

- | | |
|---|--|
| 1. 各種のリンゴの木 | 17. 各種の梨の木 |
| 2. アプリコット Apricocks | 18. Perare plum († = pear-plum) 黒と黄色 |
| 3. ヘビノボラス [メギ類] Barberies | 19. マルメロの木 |
| 4. ブリース [ダムソンの一種 bullace]
Boollesse 黒と白 | 20. キイチゴ Respis. |
| 5. サクランボ 赤と黒 | 21. スグリの一種 Reisons |
| 6. 栗 | 22. 小さなナッツ Small nuts |
| 7. セイヨウサンシュユ Cornet plums
(* = cornel plums = cornel cherries) | 23. イチゴ 赤と白 |
| 8. ダムソン 白と黒 | 24. オウシュウナナカマド Seruice の木 |
| 9. ハシバミの実 Filbeards 赤と白 | 25. クルミ |
| 10. ゲーズベリー Goose berries. | 26. ウォーデン梨 白と赤 |
| 11. ブドウ 白と赤 | 27. Wheat plums |
| 12. セイヨウスモモの一種 [greengage
か] Greene or grasse plums | 28. そしてツゲと月桂樹、サンザシとセイヨウイボタ prim [privet の別名] を植えるとよからう、小綺麗な生垣用に。 |
| 13. ワートルベリー [セイヨウスノミノ
キ] Hurlberries († = whortleberries) | |
| 14. メドラー [セイヨウカリン]
Medlars or marles | |
| 15. クワ Mulberie. の実 | |
| 16. 桃 白と赤 | |

この時代以前に、庭園の中にレッドカラント [フサスグリ] red currants [*Ribes*] の居場所があったかどうかを証明することはできない。と言うのもそういった形では全然書かれていないからである；ジェラルド Gerard [John~, 1545 頃 ~ 1612 年 イングランドの植物学者 ロンドンに大ハーブ園を所有] でさえ、1597年の時点で、そのような名前では呼んでおらず、「棘」のないゲーズベリーのとても小さい仲間で、色は真っ赤とその特徴を述べてい

る。ただ、このリストでは、“Reisons”というものが、スグリの何らかの種類を示そうとしているように見受けられる。

タッサーは12月の農作業の中で、果樹園にどのようにして木を植えるべきかについて引き続き述べている。

(仮訳)

“Good fruit and good plentie doth well in the loft	美味しい果物と豊饒の女神は物置の中で共に過ごす
then make thee an orchard and cherish it oft:	それから汝に果樹園を作り頻繁に世話をする:
For plant or for stock laie aforehand to cast	植えるか蓄えるか 予め土を掘りおこしておいて
but set or remoove it er Christmas be past	だがクリスマスの終了前に植えるか移植すること
Set one fro other full fortie foote wide	一つ一つの間は幅 40 フィートを十分に取って
to stand as he stood is a part of his pride”	元あったように植えることで樹木も誇らしげである



[図 5 - 9] 『庭師のための迷路』より

果樹園に関しては、その他の大きな変化はなかった。梨の種類の中ではウォーデンが、リンゴの仲間では大きなリンゴのコスタード種が依然として重要な地位を占めていた。桃の改良は進まなかった。 海外の果樹について語ったターナーは「私の見る限りイングランドで桃は大事な果樹とは言えず、ほどよく熟れたリンゴは柔らかく実が分厚かった」と続けた。ヘンリー8世の国王手許金からの支出を見ると、ロング氏の庭師から国王への桃の

献上が特に記載しており、国王はその他の機会にも、サクランボ、リンゴ、梨、ウォーデン、マルメロ、セイヨウカリン、ダムソン、ヘーゼルナッツ〔ハシバミの実〕、メロンを献上されて受け取っていた。

花を育てるためだけに別に庭園を造って楽しむなどということは大地主だけに許された贅沢であった。王国内の小さな荘園や農家の庭は基本的には実用のためであった。フィッツハーバート Fitzherbert [Anthony~, 1470~1538年 裁判官] はその著作『農業書』 *Book of Husbandry* (1534年) の中で、主婦が一般的にやるべき仕事について列挙しているが、その中に庭のことも忘れずに入れている。「3月初めあるいはもう少し早く、その時期が来たら主婦は庭づくりを始めること、飲み物用と食べるために必要なだけの数の良い種やハーブを用意すること、そして必要なだけ頻りに草取りをすること、そうしないと雑草がハーブを枯らしてしまう。」これらのハーブはその前の世紀のものと同じだったが、当時書かれた本には、それまでのリストにはなかったようなものも取り上げられている。そして、アスパラガス、メロン、タラゴン taragon、ホースラディッシュ〔セイヨウワサビ〕、そしてアーティチョークなどがこの頃王室の庭園で初めて育てられた。タッサーは詩の中で豆 beans とエンドウ豆 peas について何行か書いている。1月には -

(仮訳)

“Good gardiner mine	腕のいい私の庭師さん
Make garden fine	庭を上手に作ってくださいね
Set garden pease	エンドウ豆を植えてくださいね
and beans, if ye please.”	それと豆を、もしあなたがお望みなら

そしてまた

(仮訳)

“Dig garden, story* mallow, now may ye at ease	庭を掘って、マローを抜けば、ホッとすることも
And set (as a dainte) thy runciuall pease.”	そして汝ランシバル豆を植える(喜びの印として)

*おそらくリズムをとるためにしばしば使われる表現。=*weed, or destroy, wild mallow, a common weed*

さらに

(仮訳)

“Sowe pease (good trull †)	エンドウ豆を蒔きなさい(よい子たち)
The moone past full	月は満月を過ぎた
Stick bows a rowe	畝に棒の添え木をすること
where runciuals growe”	そこはランシバルが育つところ
“Set plentie of bows among runciuall pease	ランシバル豆の間にたくさんの棒を立てること
to climber thereon, and to branch at there ease.”	ツルがそれに絡まり、枝が楽に広がるように

† = *good girl, or lass*

これらの引用からわかるのはランシバル豆 runcival peas が人気の高いごちそうであったことである。それは一種の大きなエンドウ豆で、その名前はピレネー山脈のロンセスバリュース [778 年にシャルマーニュ軍が敗れた峠が近くにある村] Roncesvalles に由来していると思われる。

タッサーは豆の収穫方法についても説明を加えている。

(仮訳)

“Not rent off, but cut off ripe beane with a knife	実った豆はむしり取らないで、ナイフで切りなさい
For hindering stalke of hir vegetive life	植物の命の茎を痛めるから
So gather the lowest, and leauing the top	だから一番下の豆から集めて、一番上は残して
Shall teach thee a trick, for to double thy crop.”	あなたに教えてあげよう、収穫を倍にするコツを

日常生活の中では、庭のために何かを買うということはほとんどなかった。なぜなら毎年毎年、種は貯蔵され、植物は友人の間で分けられ交換されたからだ。

(仮訳)

“Good housewife in sommer will saue their owne seedes	賢明な主婦は夏に自分の種を蒔き
against the next yeere, as occasion needes	来年のために、必要な時期だから
One seede for another, to make an exchange	一つの種を別の種と交換すること
With fellowlie neighbourhood seemeth not strange”	近所の人たちと、それは変わったことには見えない

この結果、古い会計帳簿には庭園に種を蒔くために買われた物の記載はあまり見られない。ただし、こんなにも数多くの立派な新しい庭園を造っていたということは、そこを彩るための植物に対する需要を作り出していたに違いない。新しく設計された庭園のために買われた大量の物は、本職の種苗業者 nurserymen や市場園芸業者 market gardener だけが供給できていたのであろう。たとえば、バラの木 500 本、桜の木 600 本 (*Hampton Court Account) を 100 本当たり 6 ペンスで、というような本数は個人の庭ではとても育てられなかったであろう。

エドワード 2 世の治世下におけるロンドンの果物・野菜市場についてはすでに概観したが (+43 ページ参照 [仮訳第 2 章 9 ページ])、その時以降ガーデニングは大いに進歩し、市場も拡大するとともに、市場園芸業者が何倍にも増加したことは多分間違いないであろう。そして今と同じように市場園芸にとって好適な場所はロンドンのすぐ近郊であったが、そのいくつかは、次の引用を見るとわかるように都市のど真ん中であっても立地していた：

-

「ヘンリー 8 世の治世の後半頃、East Smithfield の Portsoken 区の貧しい人々は境界の外に追い出されて、彼らのつつまじやかな住まいに代わって、賃貸というよりは want

room のための家が建てられ、そして残った空間は Cawsway という庭師により、市場にハーブや苗を売るための庭が造られた」(†Stowe, *Survey of London*. Ed.1598 年, p.130)

果樹が一番多く供給されたのはケント州 Tenham の果樹園からであった。それが作られた歴史は「農夫のための果物一杯の果樹園」*The Husbandman's Fruitful Orchard* (1609 年) と題された風変わりな珍しいパンフレットに記されている。作者は不明だが読者への言葉には「あなたの幸福を願う N.F.」とサインされている (*Imprinted for Roger Jackson, ロンドン)。「ロンドンのリチャード・ハリスという者、アイルランド生まれ、ヘンリー8 世の果物栽培者にして、フランスからたくさんの接ぎ木、特にピピン種のリンゴの接ぎ木を持って帰ってきたが、それまではイングランドにピピン種のリンゴは存在していなかった。またオランダからはサクランボと梨の接ぎ木のいろいろな種類を持って帰ってきた：そしてケント州 Tenham 教区にある国王の土地の一画、大きさは約 140 エーカーの土地を得て：そこに果樹園を設け、外国から持ってきた接ぎ木を全部植えた。この果樹園は外国由来の果物について言えば、ケントおよび各地のすべての果樹園の母と言っても過言ではなく、またこれまでもその時々とその役割を果たしてきた。そして今述べた接ぎ木がフランスおよびオランダから持って帰ってこられる以前にイングランドにもいくらかは果物というものがなかった訳ではないものの、珍しい果物や長持ちするきれいな果物という両方が求められていた。オランダ人やフランス人たちは、これらの果物が、特にロンドン近くの地域やビリングズゲート Billingsgate [テムズ川北岸] その他各地ではほとんどないことを知って、ただ、今では(神のおかげで)接ぎ木の喜びを知った様々な紳士階級等がいるので、・・・ハリスが植えた果樹園、それは「新庭園」the New Garden と呼ばれたが、そこから接ぎ木を持ってきて多くの果樹園に植えた」。

ドレイトン Drayton [1563 ~ 1631 年 イングランドの詩人 頌詩・田園詩で知られる] が『多幸の国』*Polyolbion* を書いた時、1619 年から 22 年の間、この果樹園が依然として隆盛を誇っていたに違いないことは、次のようにほめかしていることからわかる。

“Rich Tenham undertakes thy closet to suffice with cherries” - *Song XVIII*

(仮訳) 豊かな Tenham はあなたの戸棚をサクランボで一杯にする - 歌 18

この果樹園はサクランボを作っていたと思われ、1540 年には 1000 ポンドの売上があった；当時にすればとてつもない金額であり、この頃の家計簿に、サクランボの普通の価格との比較が書かれているがこれは一つの誇張のように思われる。たとえば、「項目 1549 年 7 月 9 日、奥様のご指示でサクランボ 2 ポンド lbs. [約 900 グラム] 4 ペンス」、そして再び「1549 年 7 月 27 日、4 ポンド pond のサクランボ、4 ペンス」(†Johnson, *Hist. English Gardening*, 1829 年, p.56 Philips' *Companion to the Orchard*. Ed. 1821 年, p.79) 庭の生産物に対して付けられる普通の値段を見つけることは難しい。それはもちろん季節により、また果物の品質によっても違って来るに違いない。果物を市場に運ぶことは大変だったため値段は高くなった。ある庭師がある果物をたくさん収穫したとして、そう遠くない所で

同種の果物に高い値段がついていたとしても、運搬が困難なため、この果物に対する有利な市場を活用することができないであろう。彼らができる限りの利益を上げた訳ではなかったが、取引においていつも公正であるとは言えなかったので、次のような法律が適用された： -

「(2&3 Edward VI. c.15) 最近、食糧を取り扱う売り手の中には穏当で適正な利得に満足しないで、・・・不適正な価格で食糧を売る目的で互いに共謀、約束する者がいるので、そのような肉屋、醸造業者、パン屋、・・・行商人、果物屋には 10 ポンドの罰金又は 20 日間の拘留及び生命維持に必要なパンと水、再犯に対しては 20 ポンド及びさらし台の刑、3 回目は 40 ポンドあるいはさらし台及び両耳切除の刑」

果樹園数が増加することによりその法的保護が必要になったようであり、もう一つ別の変わった法律が制定された： - (37th Henry VIII. c.6, sect.3.)

「何人も悪意をもって、自ら進んで、または違法に、前述の 5 月 1 日 (1545 年) 以降、国王のいかなる臣民の片方または両方の耳を切除または切除されるようなことをした者は、法律の定める場合、正当防衛の場合 chance-medley、突然の乱闘の場合、予期せぬ事故 adventure の場合を除き：(6) または前述の日以降、悪意をもって、自ら進んで、または違法に、いかなる人または人々のいかなるリンゴの木、梨の木、その他果樹の木の皮を剥いだ者 (7) その時は、そのような違反者あるいは違反者どもはすべて、敗訴し弁償しなければならない shall lose and forfeit. 弁償の内容は、コモンローに基づき、被害者に対し、そのような一ないし複数の違反行為により生じた損害の 3 倍を支払うとともに、不法侵害行為により [生じた損害を] 原状回復しなければならない。またそれだけではなく、国王陛下およびその承継者に対し敗訴し、違法行為のそれぞれについて罰金として X ポンド・スターリングを弁償しなければならない」

サフランは引き続きよく使われそして市場で売るために育てられ、高値で売られた。ダラム修道院の会計簿には、「クロッカス」あるいはサフランがしょっちゅう出てくる。1531 年 7 月には半ポンド買われた；8 月と 11 月には同じ量が、9 月には 4 分の 1 ポンド、10 月には 1 ポンド半となっている；これらの項目により消費量について大体把握することができる。1539 年から 40 年にかけてサフランについては、ドンカスターのトーマス・フリーマン Thos. Freeman から買っており、ケンブリッジ出身の商人に対しては、6 ポンド半の「クロッカス」に 7 ポンド 8 シリングが支払われた。1538 年には“Braydforth fayre”で買われている。サフランは北部ではまったく栽培されておらず、前述の引用からわかるように、東部地域から運搬されなくてはならなかったにもかかわらず、北部の中では同じような値段がつけられた。ノーフォーク州の Hunstanton では「1536 年 3 月 26 日、サフラン 1 オンスは 8 ペンス、古いサフランは 12 ペンスした」(*Le Strange, *Household Books*)

それは儲かる作物で、東部地域に住んだタッサーは農民に対しそれを忘れないように注意している。

(仮訳)

“Pare saffron plot	サフランの場所を準備すること
Forget it not	忘れないで
His dwelling made trim	サフランの家を整えて
look shortly for him	間もなくそれを待つことになる
When harvest is gone	収穫が終わったら
then saffron comes on	次はサフランの番だ
A little of ground	小さな土地に
brings saffron a pound” †	サフランが富をもたらす

† *Five Hundred Pointes Goode Husbandrie.* - August

† 賢い農業の 500 の要点 - 8 月

庭園の大小にかかわらずその仕事は一人の庭師頭によって監督されていたようである。
庭師は庭園に関する物の売買、植え付けの担当をしたが、実際の耕作の手作業は日雇いの労働者によってなされ、常勤のスタッフはしなかった。庭師頭のポストは王室のすべての庭園で極めて重要な地位を占めていた †。

‡ 1532 年 - 「また前述の Edmund Gryff (yn) (庭師頭) により、当該樹木の穴掘り、収集、選別に対し 12 ペンス支払われた。またこの Edmund Gryff (yn) に対し、前述のリンゴの木の運搬に関し 15 ペンス支払われた」

1530 年 - 「庭師 1 人日当 6 ペンス」

1530 年 - 「ジョン・ハットンに対し、国王の新庭園の花壇の造成、整地、および熊手でかき均す作業に関し、日当 4 ペンスで 12 日間、計 4 シリング」 - ハンプトンコート会計簿

1540 年 5 月 8 日 - 「Claston に対し、Hunstanton の庭園の草刈りに関し 2 ペンス」 1543 年 9 月 - 「庭の穴掘りに 4 ペンス」

1549 年 12 月 10 日 - 「2 人に庭園の手伝いとして 1 週間 2 シリング 6 ペンス」 - Le Strange, 会計帳簿

1530 年 - 「4 人の庭師に 4 日間分の支払い - 3 月 18 日 2 シリング 8 ペンス」 - オックスフォード大学カーディナルズカレッジの収支会計簿 *A Book of Receipts and Expenses of Cardinal's College, Oxford.*

その賃金は年間約 12 ポンド以上、労働者への支払いのためのすべての金は庭師頭の手を通して渡された。労働者は日当 6 ペンス、4 ペンス、または 3 ペンス受け取り、食事付きの時は 2 ペンスですらあった。除草は通常、女性の仕事で、3 ペンスまたは 2 ペンスが日当の相場であった*。

*1530 年 - 「庭園と果樹園での労働者 5 人と除草する 15 人の女性；」また「除草する 20 人の女性、労働者 2 人、草刈り 2 人」 - 除草する人の名前前のリストが続き、男性は日当 4 ペンス、女性は 3 ペンスの受取 - ハンプトンコート会計簿

4月23日(1530年) - 「2人の女性に対し、庭園の中の役に立たないハーブを根っこから引き抜く作業 (extirpantibus herbas inutiles) に関し3日間で16ペンス」

6月6日 - 「マーガレット・ホールに対し、庭園の清掃代として3ペンス」

6月23日 - 「ジョン・フェリー、作業3日間、10ペンス」

8月19日 - 「アグネス・ストリンガーへの支払い、作業2日半、7ペンス」

女性の庭師に関する記載がもう少しこれらに続いている：「すべて女性である庭師たち(のための)、パン、飲み物、ニシンその他のものへの支払い、第7週の第2期の支出簿に記載されているとおり、2シリング $1\frac{3}{4}$ ペンス」 - オックスフォード大学カーディナルズカレッジ

「除草する3人の女性、6ペンス」 - Le Strange, 会計帳簿

庭仕事の道具は最も早い頃から大きくは変わっていない。私たちが今使う鋤やレーキはチューダー朝の時代のものとほとんど同じである。(† *Five Hundred Pointes Goode Husbandrie.*)

タッサーは、次の一節の中で、当時使われていた道具について列挙している。

(仮訳)

“Now set doo aske watering with pot or with dish さて準備をして甕か大皿で水やりを頼みなさい
new sowne doo not so, if ye doo as I wish 新しく種を蒔いた時は別だが、もし私の望むようにあなたが

Through cunning with dible, rake, mattock and spade 種苗用穴掘り、レーキ、つるはし、鍬で巧みに

by line and by leuell, trim garden is made” ラインと高さを合わせれば、庭は整う

これらの道具の価格については各種会計帳簿より知ることができる。価格は4ペンスから1シリングの間であった‡。

‡ハンプトンコート、1533年3月。項目：国王の新庭園で使う鉄製のレーキ3本、1本6ペンス - 18ペンス。項目：同じ庭園用の手斧、6ペンス。項目：新庭園の生垣の刈込み用の新品のナイフ3本、1本3ペンスで9ペンス。項目：新庭園の計測・設定に使う巻き紐 round line 6本、12ペンス。項目：カッティング・フック [鍵型の切断用具?] 2個、2シリング。項目：切断用ナイフ2本、4ペンス。項目：レーキ2本、16ペンス。項目：ノミ2本、6ペンス。項目：接ぎ木用鋸、4ペンス。項目：ノーフォークのHunstanton で使う鋤への支払い、1538年7月7日に8ペンス、また同年12月1日に5ペンス、そして「庭園用の手斧、レーキ、鉄製器具 pairing-iron に10ペンス、1543年3月11日」 - Le Strange, 会計帳簿

おそらくこれらの道具の多くは手作りであった。フィッツハーバートは1534年『農業書』 *Book of Husbandry* の中で「鍬やレーキはどのように作られるべきか」について一節を割いている。それによると、道具は冬のうちに準備されるべきで「農夫は火のそばに座

Cold herbs in hir garden for agues that burne	庭の冷たいハーブ
that ouer strong heat to good temper may turne.	強い火にかけて
Get water of Fumentorie, Liuer to coole	Fumentorie の水を用意し、Liuer を冷やす
and others the like, or else lie like a foole	同じようなほかのもの、などがバカのように嘘をつく
Conserue of the Barberie, Quinces and such	バーベリー、マルメロなどのジャム
with sirops that easeth the sickley so much.”	病人をあんなに楽にするシロップを入れて

1527年、とある出版者の「ローレンス・アンドリユー」Laurens Andrew が翻訳し、『あらゆる種類のハーブ汁の蒸留に関する実用書』*The vertuose Boke of Distyllacyon of the Waters of all manner Herbs* というタイトルの著作を出版したが、それはドイツ語の『ブランズウィックのジェローム』Jerome of Brynswicke (Bruswick) から翻訳されたものであった。それは全体を通じて美しい版画で図解されており、そこには驚くべきレシピが掲載されている。もし主婦がこれに従ったとしたら、病の上に恐怖を重ね、多分、彼女の友人や関係ある人々に対し、善よりも害悪を与えていたに違いない。植物の中で使用が勧められているのが黄色のユリ、紫色のアイリス *floure de luce*、ツルニチニチソウ、テクトラム [ヤネバンダイソウ] *house-leek*、赤と白のバラ、ナルコユリ *Solomon's seal*、スイカズラ *woodbine*、シャクヤク、マリーゴールド [キンセンカ] であり、これらがイノンド *dill*、ワレモコウ *burnet*、セイヨウタンポポ *dandelion* などのハーブと、サクランボ、マルメロ、桃の葉、リンゴ、ナッツといった果物とあわせて勧められた。

ノーサンバーランドの第5代伯爵の家計簿（1502年）には次のようなハーブ「蒸留用ハーブ」*herbs to styll* のリストが掲載されている。「ポリジ、セイヨウオダマキ、ビューグロス [シベナガムラサキ] *buglos*、ギシギシ *sorrel*、カウスリップ [キバナノクリンザクラ] *cowsloppes*、マツムシソウの一種 *scabious*、ワイルドタンジー [エゾヨモギギク] *wormwood*、エンダイブ [キクチシャ] *endyff*、セージ、セイヨウタンポポ *dandelion*、そしてオオエゾデンタ *hart's tonge*」。各家庭のハーブはこの目的だけのために育てられ、これらの甘い香りの水 (*sweet waters*) は薬としてまた料理用に使われた。蒸留したハーブはご近所の贈り物としてたびたび交換され、裕福な人々がより貧しい友人たちから「甘い香りの水」、「バラの水」、「バラのシロップ」などのプレゼントを受け取っていたことの記録を見つけることは難しいことではない。同様に花や果物のお届け物も珍しいということではなかった。Titteshall の教区牧師 *parson* は Hunstanton の大地主に梨とリンゴのプレゼントを届け、「お使いの少年」はそのお使いに対して1ペニーをもらった。別の時には「女の子たち」が同じ教区から彼に赤いバラを届けた (**Le Strange, Household Books* (1540))。ノリッジの司教はバッキンガム公爵にサクランボ一皿を送り、あるメーデーの日には「Kanisham の4人の少女たちがサンザシのプレゼントを、自分の果樹園の中にいた公爵様に届けた」(†*Duke of Buckingham's Household Accounts.*)。ここで

Kanisham のこの 4 人の少女にまつわる可愛いお話をちょっとしてみたくなるかもしれない。それほどの想像力がなくても、このような単純な記録を見るだけで、楽しい光景を思い浮かべることは簡単なことであり、チューダー朝時代の家庭的な田園生活の魅力的なシーンを多数容易に描き出すことができるのである。